

Title	故 上田辰之助名誉教授
Author(s)	大塚, 金之助
Citation	一橋論叢, 37(5): 423-434
Issue Date	1957-05-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/3935
Right	

故 上田辰之助名誉教授

大塚 金之助

日本学士院会員・一橋大学名誉教授・経済学博士・故上田辰之助氏は一九五六年十月十三日に急死した。私は、その突然死の知らせをベルリンでうけとり、あまりの突然さに、とりあえず、『上田辰之助君』という標題で、パーソナルな思い出を『一橋新聞』に書き送った。

それから五ヵ月たった。私のまえには、本号巻末の詳細な年譜（まだ十分に明らかでない点があるそうである）と著述目録とがあり、また、私以上に長く・親しく教授の学問と人間とを知り、または私以上に教授と密接に協力した一流の内外人が広い視野から書きたいいくつかの追悼文があり、その手近かなものは本文の終りに追記

故 上田辰之助名誉教授

してある。これらの資料によって、私たちは上田教授のインテレストが、語学、英文学、経済史、経済思想史、社会思想史の研究、対外文化連絡、経済学史学会、教育、文化、大学教授連合の仕事から、クォーターとしての一貫した宗教学活动や日本の古典芸術にまで深く・かつ幅広く四十年以上にわたって成長してきたのを知ることができる。このような広い精神的振幅を持った人物を一人の手でとりあつかうことは到底できるものではない。したがって、ここでは、すでに発表されている各方面のヨリ適任な人たちの評価を *Freely* に引用して私のせまい見聞に偏しないようにしなければならない。

上田教授の語学力・勉強・人物については、まず、市河三喜博士のつぎの総括的な追悼文を読んでいただきたい。

It is forty-five years ago that I first saw Tatsunosuke Ueda, a student of the Commercial College. He appeared on the stage of the Hitotsubashi Hall in the role of Adam the old servant in *As You Like It*, which he acted to perfection. Afterwards I was told that even in his school-days he was head and shoulders above in English. His talent for language, later extended to German, French, Italian, Spanish, Latin and Chinese, served him as a valuable asset, for it enabled him to make many a friend among foreigners, as well as to enrich his learning and broaden his vision. (Japan British Society, No. 10, Dec. 1956)

なお、上田教授は、一九三三年(昭和八年)から一九四六年(昭和二十一年)まで、語学教育研究所の理事を勤めていたが、市河三喜博士は、上田教授を追憶してつぎのように書いている。

『神田乃武先生の伝記は彼の筆になるもので中々の名文である。英文学の研究についての造詣は相当深いものがある。』

った。』(『語学教育』一九五六年十二月十一日)
イギリス人のレッドマン氏は、上田教授がその語学力によつて、西洋文化および西洋的ヒューマニティーに結びつき、上田教授にとっては、西洋文化と西洋経済思想史の研究とが同じ重みを持っており、しかもなお、上田教授が最も日本人であったことを指摘しようとした。

I first met Tatsunosuke Ueda twenty-nine years ago and he corrected my English. I was very young and the newest member of the faculty of the Tokyo University of Commerce. I was a little fearful at this making contact with one who was described to me as one of the most promising economists in the university,.....

.....his interest in the English language was as great as his interest in his more specialized field of study.....I think that he was equally interested in both. His English scholarship was only part of a much broader equipment in the occidental humanities, which included at least three of the modern European languages as well as Latin and Greek. Occidental culture as a whole was certainly as im-

portant to him as the science of economics. (Japan
British Society, No. 10, Dec. 1956)

なお、その上に何か私がつけ加えることができると思
れば、それは、人があまり気づかないことではあるが、
上田教授が日本語にすぐれていたことである。もう四十
年もまえにならうか、神田乃武先生の慰安の会合が持た
れたとき、出席の教授たちは、神田先生の英語の語学力
だけをほめていたが、福田徳三先生は、意外にも、『諸
君は、神田先生の英語の上手なことを知り語っていない
が、神田先生の日本語がうまいことを知っていない』と
語ったことがある。私は、このことは上田教授の場合に
もあてはまると思う。上田教授は、東京のしたまちに生
れながら、教授の日本語はいわゆるしたまち言葉という
東京村——この言葉は私の発明ではなく、戦前に東京を
訪れた『フランクフルト新聞』の新聞使節が、その通信
文のなかで東京を世界最大の村と特色づけたのを借用し
たのである——の方言ではなく、六十年の生活体験と四
十年間の内外人との接触や研究生活とのあいだにみがか
れて、発音といいイントネーションといい、りっぱな標

故 上田辰之助名譽教授

準日本語であった。教授の日本語は、その話術に役立っ
たばかりでなく、長いあいだにその思想および文章の洗
練に役立ってきたものであり、教授の語学力の一端を示
すものである。経済科学や社会科学においては、語学力
は研究のためのたいせつな武器であり、人間形成の土台
である。

三

上田教授の学問的業績とイギリス文学に関する広い知
識とについても、すでに、市河三喜博士が総括的な評価
を与えている。

His chief work, *A Study of Thomas Aquinas' Economic Thought*, won him recognition by the French and Italian Governments. His other work on Mandeville's *Fable of the Bees* (in Japanese), together with his article on "Mr. Spectator as an Economist" and his last work "Saikaku's 'Economic man'", both written in masterly English, show him at his best, embodying his vast knowledge of eighteenth century English literature, including Swift, Defoe, Pope, Addison and Steele and the result of his inde-

fatigable researches on the Japanese playwright Sakai. If he had been granted a longer life, he would no doubt have made an interesting contribution towards a comparative study of English and Japanese literature.

While he was very strict, often severe, in his attitude towards learning, he was tender and sympathetic towards his friends and pupils..... (Japanese Society, No. 10, Dec. 1956)

これと言いつくされている。もしこれを日本語ですこし解説すれば、上田教授がわが国だけでなく、世界の経済学界に残した業績は、古代ギリシャから中世を経て十八世紀にいたるヨーロッパ経済思想史の源泉資料的研究である。その主なものを見やすく時代順に配列すれば、

『古代及び中世経済学史』、昭和十四年（一九三九年）
（『新経済学全集』第二回配本）。

『聖トマスに於ける職分社会思想の研究』、東京商科大学研究年報第二号、昭和八年。

『聖トマス経済学——中世経済学史の一文獻』、刀江書院、昭和八年（一九三三年）。

『トマス・アクィナス』三省堂、昭和九年（一九三四年）。

『蜂の寓話——自由主義の根底にあるもの——』、新紀元社、昭和二十五年（一九五〇年）（マンドヴイルに関する研究）。

ヨーロッパおよびアメリカ合衆国にも、このように広い期間をあつかった西洋経済思想史の著書はいくつかあるが、この長い期間の経済思想について上田教授のように長年の源泉資料的研究をつづけた経済学者は西洋にもめづらしい。この点では、上田教授は、経済思想史研究においては福田徳三博士を乗り越したばかりでなく、世界の水準に達していたものといふことができる。なおその上、上田教授は、徳川中期の文芸作品をとおして経済思想を発掘するという未開処女地の開拓に着手した。上田教授は、平生よく、『西洋から借りるだけでなく何か返さなければならぬ』と言って、フランスのイギリス史研究家エリー・アレヴィ (Élie Lévy) や外国人の日本研究家の名をあげていたが、教授みずからそれを実行したのである。しかもその研究に当っては、教授の一生を

特色づけた謙讓な態度をもって材料を自分の手で掘り出そうとした。ここに、教授の独自のアプローチの仕方と学風とがあらわれている。このことは、教授自身をして語らしめるのがいちばんいい。

『經濟思想史は各期の代表的著者をなるべく網羅的に取り上げ、その所論を一々論評すべきものだと思ふ。文獻は理想的にいへばすべての場合に原典を利用し二次的資料はほんの参考の程度に止めるのが本當であらう。だが實際には各期の主要思想家を網羅することも嚴正なる原典使用もその一つだけでも完全に之を行ふことは到底一人の力の及ぶ所ではない。歴史の長い期間を取扱ふ系統的歴史の執筆のむづかしさは實に茲にある。……』

……わたくしが茲で論じてゐる著者の思想は、原典入手できなかつたアントニヌスとベルナルディーヌスとの二人の場合を除き、他はすべて丹念に原著からわたくし自身で讀みとつたものである。個々の思想家の所説についての論評が比較的詳細であるのもこの事情によるもので……もちろん誤謬や獨斷も少くならうが、兎に角材料はみづからの手で掘りだした鑽石であるといふ點に筆者としての満足がある。(用字やかなづかいは原文どおり)(『新經濟學全集』第二回配本、昭和十四年(一九三九年)十一月、『古代及び中世經濟學史』一一二ページ)

故 上田辰之助名誉教授

昭和十四年(一九三九年)といえ、ドイツ軍隊がポーランドに侵入して緒戦の勝利を収めた年であり、ドイツの生活經濟学とか戦争經濟学とか統制經濟論などが、世界政治の力を背景としてこの国の經濟学界の風潮となつていたときである。このような風潮のなかで、上田教授はしづかに古代ギリシャ資料やヨーロッパ中世資料と取り組んでいたのである。

四

上田教授の經濟思想史研究は終生変らなかつたが、第二次世界戦争後には、一橋大学の改組も一因となつて、經濟思想史を裏づけとした社会思想史にも関心を示した——というよりは、不自由な時代に教授の經濟思想史のなかにとじこめられていた社会思想的な部分が表面にあらわれてきたのである。惜しいことに、そのほんの一部分が活字となつて世に出たときは、教授はすでにこの世の人ではなかつた。それらは、本号巻末の著作目録に出ているように、短い形をとりつつも、広く・深く・長年の蓄積がなくてはとりあつかえないものばかりであ

る。活字になったものは、編集のつごうで、略字署名を削ったり、用字をなおしたりしているが、今、遺産管理人——ちなみに上田教授には遺産相続人がない——の手にある上田教授のなまの原稿を読者のお目にかけて、教授のインテレストがいかに広がったかを知っていただきたい。

教授は、学問の自由 (Academic freedom) についてはつぎのように書いている。

アカデミック・フリーダムはまた『大学の自由』とも訳す。ただし主として大学の教員が研究および教授にあたり与えらるべき自由を指すからである。この意味の自由はまず近世初期のドイツ大学で主張されて以来、広く欧米諸国で認められるようになり、日本憲法もまたワイマール憲法(第四百十二条)やドイツ民主共和国憲法(第三十四条)にならぬ。『学問の自由はこれを保障する』(第二十三条)と規定している。しかし実際には往々にして政治的権力の圧迫や経済的勢力の干渉または人種的偏見などによって学問の自由が不当に制限されたり、無視されたりする場合があることは内外諸国の事象に徴して明かである。そこで、学問の自由を守ることは世界を通じて大学教授の共通課題として深い関心が払われている。例えば、アメリカでは全
国大学教授協会(The American Association of Univer-

sity Professors) が一九一五年以来、しばしば Principles of Academic Freedom and Tenure を公表し、学長および教授の任免権をもつ理事会(Board of Trustees) または州当局が思想その他の理由で教授に加えることあるべき干渉に備えている。この原則声明には大学教授の自由とその義務が説かれ、それが不当に犯されたとき、当該教授として、また協会として採りうる措置が詳細に言明されている。日本の全国大学教授連合も創立以来、学問の自由の擁護をその最も重要な任務としている。「文献」『全国大学教授連合会報』第七号一九五二年

この短い文章は、単に bookish なものではなく、教授が大学教授連合の重要役員として南原繁会長を助けた実際の経験に基いているのである。大学教授連合をとおして、上田教授は、この国の学問の自由に寄与したのである。

上田教授は、イギリス風の寛容な態度を身につけていたが、同時に公正をモットーとしていた。そのことは、教授の『国法不服従』(Civil Disobedience) についての短い原稿にも見られる。

一般的に言えば、国民が公正を欠くと思われる自国の法律や政策に反対し、これに服従しないことをいい、暴動な

いし革命はその最も激しい現われたが、その外にもさまざまな形態がある。政府にたいする消極的抵抗 (passive resistance) とか非協力運動 (non-co-operation) とかいうものは国法不服従の本質または傾向をもつ。例えば租税不払運動や戦争参加への良心的反対 (conscientious objection) ないしはゼネ・ストなどは明かにこれに属する。多くの場合、被圧迫者が支配者の圧制に反抗して行うもので、とくにイギリス支配下のインドや独立前のアメリカ十三州にしばしば行われた国法不服従は重大な歴史的結果を生んだ。社会思想史のうえからみると、国法不服従は近世市民社会の発達と密接な関係がある。典型的な実例は十七世紀イギリスにみられるが、ハムデン (John Hampden, 1594~1643) 一派が、チャールズ一世のらわゆる船舶税 (ship money) 不払の挙にいたのをはじめとして、諸宗派が国教会の信条、礼拝形式あるいは教会組織に異を唱え (dissent)、激しい迫害と戦いながらそれぞれ独自の道を開拓するにいたった経緯はそれを物語るものである。いいかえると、かように国権にたいして異議を唱える伝統 (the dissenting tradition)こそイギリス市民社会を顕著に特徴づけているものであって、沿革的には国法不服従の動きと無関係ではない。ことに少数意見の尊重となって現われる寛容の精神がこれに結びつくに及んで、イギリス社会は民主主義の方向に巨歩を踏みだした。国法不服従の原理としては、いろいろな形で自然法に訴えられるのが普通だ

故 上田辰之助名譽教授

が、中世でも一種の社会契約思想にもとづいて、暴王の追放が説かれ、近世では自然権の見地から革命が論じられるようになった。アダム・スミス (Adam Smith 1723~90) も『国富論』のなかで悪法の性格をもつような関税政策にたいしては密輸入をもつて対抗するのが自然の正義 (natural justice) に合致すると極言している。〔文献〕 H. N. Brailsford, *Civil Disobedience* (Seigman, Encyclopedia of Social Sciences)

これが略字署名をもって書かれた上田教授の原稿である。つぎに、上田教授の英文学史研究が社会思想史と結びついている一つの例は、ミルトン (John Milton, 1608~1674) についての原稿である。

シェイクスピアと併称されるイギリス詩人だが、社会思想史のうえでも重要な役割を演じた。まず王政に反対して共和制 (The Commonwealth) 時代の精神を強く表現したが、チャールズ一世の治下におどすでに離婚の自由や「思想および言論の自由」 (the liberty to know, utter and argue freely) を強調する『Areopagitica』 (1644) なる大文章を発表し、その『The Tenure of Kings and Magistrates』 (1649) では専王を審判処刑する権利が国民に在ることを論じた。〔文献〕 G. P. Gooch, *English Democratic Ideas in the Seventeenth Century*, ed.

by H. J. Laski, 1927.

上田教授が現代イギリスの劇作家であり、文明批評家でもあったバーナード・ショウ (George Bernard Shaw, 1856~1950) に深い関心を持っていたことについては、私も書いたことがあるが、教授の関心がいかに行き届いていたかについては、つぎの短い・しかし内容のゆたかな・圧縮された・教授自身の原稿を見ていただかなければならない。

アイルランド生れの劇作家、長いその生涯を通じてイギリス文壇に重きをなすと同時に、ウェップ夫妻 (Sidney and Beatrice Webb) とならんでフェイブアン協会 (The Fabian Society) の創設者、および終始その大黒柱として、イギリスの社会思想の指導に大きな貢献をなした。かれの数多い機智に富む劇には鋭い社会批判が含まれ十九世紀末から二十世紀はじめの数十年に亘るイギリス人の思想、生活、偏見とうにワザビのきいた諷刺があびせられている。特に、各問題劇のはじめにつけられた長い序文ないし緒論はそれ自体、さながら独立した論著のように見える。例えば The Doctor's Dilemma (1906) の序文 Preface on Doctors には商売主義の數医者を排撃にフェイブアン社会主義の立場から滔々數方言が費されている。だからショーの社会思想を研究するには、Fabian Tracts や The

Intelligent Woman's Guide to Socialism and Capitalism (1928) は勿論、文芸評論や、戯曲の隅々まで注意しなければならぬ。けだしかれの社会的主張は遠慮なく何処にでも頭をだす癖があるからである。

限定されたスペースのなかでショウの社会思想をこのように圧縮して書くことは、上田教授でなくてはできないことである。

さらに、もし私の記憶がまちがっていないならば、上田教授は、新渡戸稻造博士 (1862~1933) 宅で結婚式をあげたはずであるが、イギリス風の市民社会批判の精神を持つ上田教授は、その原稿のなかで、新渡戸博士の国際主義のなかにかくれていた伝統的国家精神を見のがさなかつたのである。

農業経済学者で著名な国際主義者。内村鑑三などと共に札幌農学校に学び、のち米独に留学、主として経済学および農政学を修め、滯米中キリスト友会 (quakers) の信仰に入った。帰朝後まず母校に教え、つづいて台湾総督府技師に就任、同島の糖業の発達につくしたが、再び学界に戻り、京都、東京両帝大の講壇に立ち、併せて第一高等学校長として顕著な教育的業績を挙げた。さらに大正八年 (1919) から同十五年 (1926) にかけては国際連盟事務次長

として国際主義の普及に貢献した。晩年はもっぱら諸々の教育および文化事業に力をつくしたが、満州事変と共に、軍部の圧迫を受けて苦境に陥った。社会思想家としての新渡戸を評すれば、広い意味での教育者としてかれが明治大正時代の日本社会にデモクラシー思想の種子を植えたこと、輝かしい功績を認めなければならない。同時にまたその思想の底流に伝統的国家精神が醸成していたことは否めない。そのことはかれを世界的に著名とした英文著書『*Shido*』(1899)やかれの専攻学科が植民政策であった事実を想えば、その一端を知りうるだろう。〔文献〕石井満『新渡戸稲造伝』(東京1966)、高木八尺、前田多門編……〔この文献の最後のところ原文読みにくし——大塚〕

五

上田教授のエピソードを探し出そうとすれば、いくらでもある。私は、『伝説』を作りあげないように注意しながら、ここではその一つ二つを。

書物について上田教授が細心であったことについては、東京教育大学名誉教授福原麟太郎氏が、

『豪傑みたいな風貌で細事に頓着せず、のよような印象を与えるけれども、本当は綿密な人であったようだ。』〔『英語青年』昭和三十二年三月一日〕

故 上田辰之助名誉教授

と書いている。これは、上田教授が福原氏から借りた書物に、包紙をかけて、背中に Charles Lamb and the Lloyds (E. V. Lucas) …… Fukuhara と書いておいたため、上田教授の突然死にもかかわらず、事後の整理に当たっていた人からその書物が福原氏の手に戻ったというエピソードのことである。しかし、これを単なるエピソードというのは適當ではない。これは、上田教授の教養の一端を示すものだからである。この国には、『本を貸す馬鹿、借りる馬鹿』といういい伝えがあるそうである。私もこの国の学者、社会運動家、学生諸君からの被害を何度かうけ、また現にうけつつある。図書館が定期的に貸出書を整理するように、貸出しの私蔵本を返していただきたいと通知すると、たいがいの人には氣持を悪くする。西洋人はそうではない。安心してほうっておいても、帰国の直前にちゃんと書物を返してよこす。日本人の場合には、おそるおそる、『おすみになっていたらお返しねがえませんか』といわなければならぬ。上田教授の場合にはそうではない。これは、図書館の書物を何年もつづけて長期借出しをする風習のあるこの国では、ただごとで

はなく、上田教授の教養の高さを物語るものであり、教授の書物モラルは、教授の内面的教養の一つの外面的表現にすぎないのである。

上田教授のりっぱな学問的業績は国際的に認められているが、それと同時に、教授には、あまり人の目に立たない・古い言葉だが縁の下の力持ちのような仕事がたくさんあった。一橋大学のゼミナール指導はもちろん、その経済学部長として、あるいは学長代理として、各人・各部・全学のすみずみにまで心をくばったり、大学教授連合の仕事をしたり、この連合の関係から南原繁会長の劃期的なワシントン演説（一九四九年）に力を貸したことなどは、ほんの一―二の例にすぎず、しかもそれは周知のことである。かくいう私も国際的な教授の（古い言葉だが）陰徳に浴した一人であるが、あるいはこの一文が届かないところに、どれだけの人たちが教授の陰徳に浴しているか、はかり知れないものがある。個人が教授の陰徳に浴しているだけでなく、研究組織・学会・教育組織・宗教組織・芸術組織までがこの陰徳に浴している。その徳の及ぶところははかり知れないほど広く、教

授自身は、そのことについてはほとんど人に語らないので、私たちは、残されたスクラップ・ブックのなかの切りぬきや書類や年譜からその徳を見つけ出すのである。

六

上田教授は、晩年のさびしさのなかでも、力のある限り勉強をつづけ、また広い方面に活動した。そのさびしさの原因の一つは、レットマン氏のいうとおりであった。

In the old days, there was the charm of his household presided over by his wife, a gay, engagingly mischievous, participant in all his affairs. The Uedas were real companions in a way that is still relatively rare in Japan. Her death, in 1947, was a great loss to him.....after her death, there was around him a sense of loneliness, about which his friends could never really do anything effective. (Japan British Society, No. 10, Dec. 1956)

この引用文の最後のところは文字どおりそうなので、あの広い周囲の人たちもほんとうにどうすることもできなかった。上田教授の応接室には、教授の最後まで、夫

人の絵画や作品がうつくしくならんでいたのである。
 レッドマン氏は、その追悼文をつぎの文章で結んでい
 る。

Cultured, sardonic, independent-spirited, generous,
 lonely, stimulating Ta-chan; we shall never know
 quite his like again. We miss him very much. (Ja-
 pan British Society, No. 10, Dec. 1956)

これが、長い近代文化と近代の政治思想・経済思想の
 伝統を持つイギリスに生れ、上田教授と二十九年も交際
 して、追悼文で『辰ちゃん』と呼びうる人の文章なので
 ある。私たちは、この文章をよく味わわなければならな
 い。とかく経済構造からくる浮沈のはげしいこの国の社
 会では、四十年以上も研究生活をつづけてきた人物の一
 面あるいはその人物の歴史のある一点を時の思想風潮か
 らとらえてわが田に水を引くような評価もありうるし、
 事実、過去においてそういう評価もあった。『一橋新聞』
 への寄稿家自身が『ナチス、伊太利のファシズムが一見
 反動主義的でありながら、尚次の世紀への昂揚を意味す
 る』とファシズム化して、その立場から上田教授の学問
 的成果を暗示に富むものとした時期があった。しかし、

故 上田辰之助名誉教授、

私たちは、何よりもまず、長い目でこの国の社会の動き
 と個々の学者の学問生活とを見つめる練習をしなければ
 ならず、そうしてこそ、上田教授の人生と学問との国際
 性を正しく評価することができるであろう。

これからの若い人たちは、上田教授とはちがった世界
 史のなかで前向きに生きるのである。だからこそ、その
 人たちの人生と学問とはいよいよ国際的性格を持たなけ
 ればならない。上田教授の死によって、私はこの確信を
 ますます強めたのである。

資料——手近かなものを日づけの順に。

- 一、東京商科大学・一橋大学『日本学士院会員推薦理由
 書』昭和二十四年（写真にとったもの）
- 二、『国際基督教大学新聞』第九号、一九五六年十月十八
 日、『上田教授急逝さる』（神田盾夫、日高第四郎両氏
 談）。
- 三、福原麟太郎『ある学者のこと』、『読賣新聞』一九五六
 年十月二十日夕刊、随想欄。
- 四、大河内一男『東京新聞』一九五六年十月二十一日朝
 刊、石筆欄。
- 五、福原麟太郎『上田辰之助博士を憶う』、『あるびよん』
 一九五六年十一月号。

一 橋論叢 第三十七卷 第五号

- 六、早稲田大学文学部大学院英文学研究室編『英文学』第十二号、一九五六年十一月三十日、尾島庄太郎『彙報』。
- 七、Professor Tatsunosuke Ueda, by Dr. Sanki Ichikawa and Mr. H. Vere Redman. In: Japan British Society, No. 10, Dec. 1956
- 八、『如水会会報』一九五六年十二月号、上田辰之助博士追悼欄(平井四郎、水谷九二吉、阿部充明諸氏)。
- 九、市河三喜『あゝ上田辰之助君』、『語学教育』第二三四号、一九五六年十二月十一日(市河三喜著『旅・人・言葉』ラベント社、一九五七年三月刊に収録)。
- 一〇、高垣寅次郎 上田辰之助会員追悼の辞、日本学士院、一九五六年十二月十三日(『日本学士院邦文紀要』に収録予定)。
- 一一、『友信』故上田辰之助博士追悼号、一九五六年十二月二十五日。
- 一二、平松幹夫 『チャンボンはいけない——上田辰之助先生追憶』、『あるびよん』一九五七年一月。
- 一三、布施公平 十月例会兼上田辰之助君追悼会、『如水会会報』一九五七年一月号。
- 一四、福原麟太郎『四等学者』、『文藝春秋』一九五七年一月号
- 一五、南原繁『週刊朝日』一九五七年一月十三日『問答有用』のなか。
- 一六、『橋新聞』一九五七年一月二十日、上田名誉教授を偲ぶ(山中篤太郎、本位田祥男、五島茂、藤浪与兵衛、磯部浩一、楠舎典男諸氏)。
- 一七、大石徳四郎『忘れ得ぬ友』、『如水会会報』一九五七年二月号。
- 一八、『明治学院論叢』第四四号第二輯『経済学研究四』、学内消息欄。
- 一九、『英語青年』第百三卷第三号、一九五七年三月一日、故上田辰之助博士追悼の欄(Sanki Ichikawa, H. Vere Redman, Arundel Del Re, 斎藤勇、福原麟太郎、R. A. Close, 安積得也、伊東三代三、楠舎典男諸氏)
- 二〇、南原繁『上田辰之助教授の憶い出』、『全国大学教授連合会報』一九五七年三月発行予定。

(一橋大学名誉教授)
(一九五七・四・四)